前号を読んで

「筑波フォーラム72号」を読んで

都築正巳
図書館情報メディア研究科教授

この度「前号を読んで」の執筆を依頼されたので、拾い読みでは失礼だろうと思い、対象となる「筑波フォーラム 72 号」を丹念に最初から最後まで読み通してみた。大学院教育特集号の第 2 部であるが、中心となる大学院教育の現場からの執筆者が 26 名、講義や研究に関する個々人の自由な報告、さらに学術的なエッセイや提言、本学と係わりの深い学外者の意見などを合わせると総勢40名を越える執筆者からなる。いずれも研究と教育という重い課題との真摯な取り組みを示し、読み応えがある。またいずれも共通する時代の文脈を示すが、時代の趨勢に対する立場は一様ではない。組織の代表者もあれば、個々人の立場もあり、学外の眼もあるので、全体として共通するビジョンが見えてくるわけではない。理工系を優先する時代に文系と理系が同じ枠に収まるわけがない。特定の組織でさえも、代表者がビジョンを描いて見せると、個々人がその裏を示してくれるから面白みが増し、錯綜するものが渾然一体となって、エネルギーを感じさせる。筑波大学が擁する人的資源の豊かさを示している。

私は文系のはしくれだから、文系の方々の問題意識は身につまされて良く分かるが、文系だからといって、分野が異なれば、もう学問の奥義は分からない。その点では理系の分野も私にとっては同じである。逆に理系の分野でも大学院教育の現場からの生の声は共感できるし、学問の奥義に関しての片鱗をも理解させてくれる。

ともあれ、「筑波フォーラム72号」の共通の問題意識は「独立法人化」を巡っており、全体の基調として漂う危機感や悩みはすべてそこから来る。それ自体、時代の波に乗って為政者が生み出した安直な装置にすぎないが、それが大学と大学人の存在根拠を問うものとなっている。それは外側から押し寄せた負の要因である。しかしそれを内側から生産的なプラスの要因に変えようとする姿勢が随所に感ぜられる。それは他者への歩み寄りであり、文系は理系を、理系は文系を理解しようとする動きであり、運命共同体を意識することで学問的な相互理解のみが大学の未来を救うという認識をもたらしている。

（つづき　まさみ／国際文化情報論）